

# だんじりの社名社紋の由来考察

久世だんじりの名称は「〇〇社」と漢字三文字の最後が“社”で、これは氏子のだんじりを示すと言われます。「俄留(にわかどめ)」然り、だんじりの社名社紋も久世独特のもので、特に、江戸後期から昭和初期にかけ創建されただんじりは社名社紋の由来がはっきりしておらず、調査及び聞き取りに基づき考察しました。

※ 俄留 江戸期から明治期に流行った素人による即興の芝居などを「俄」といい、家々の前で俄を演じては錢をせびるためお断りの意味でだんじりが家の玄関などに「俄留」と書いた札を貼り、今日は寄付・花を頂いたお礼で貼られています。

NPO法人久世だんじり振興会  
2019年10月

## 上組『上王社(かみおうしゃ)』

上王社は、上町と早川町のだんじりで氏神は朝日神社です。朝日神社は“牛頭天王(ごずてんのう)”を祀り“天王(てんのう)さん”と呼ばれていました。社名の“王”の字は、この牛頭天王或いは天王さんの“王”の字を頂戴したと思われま

※ 朝日神社と改称したのは明治10年で、それまでの社号は牛頭天王宮です。

“天王さん”は、摂津国と山城国の境“天王山”とも読め、“山崎の戦い(天王山の戦い)”が連想されます。本能寺の変(1582年6月2日)で織田信長を討った明智光秀は、備中高松城(岡山市高松)を攻めていた羽柴秀吉(豊臣秀吉)の中国大返しにより山崎の戦い(1582年6月13日)で敗れます。上王社の表紋は“桔梗”で土呂幕や鉄板などは水色を基調としており、“明智光秀”の家紋の水色の桔梗と合致します。



また、上王社は表紋「桔梗」と裏紋「車」の重ね紋です。江戸後期、創建当初から上王社と名乗り、社紋は「桔梗」だったと思われま

江戸後期から使っていたと思われる宮提灯は、「上王社」と「西王社」が書かれており、上町が町の西に位置することから。或いは、下組の東明社も江戸後期に登場しており、東に対抗して西の字を提灯に使ったとも考えられます。また、裏紋を作る際、既に表紋「桔梗」の中に“上”を書き入れていたことから、裏紋「車」の中に“西”を書き入れたと思われま

## 上組『中央社(ちゅうおうしゃ)』

江戸後期、2~3年の間に4社の担ぎだんじりが創建されたと言われ、その一つが中町の中央社です。



社名は読んで字の如く、町の中央に位置することからと聞き及びま

社紋は、「車」に“モト”とカタカナで書かれ、大正中期、久世だんじりで最初にコマ(砂利輪)をつけただんじりに由来し、裏紋です。

表紋はだんじりの宮の前後に掲げる社旗や提灯で確認でき、「蛇の目」と思われま

「蛇の目」紋の旗印で有名な武将は、山崎の戦い(天王山の戦い)で羽柴秀吉(豊臣秀吉)軍の秀吉本隊直番衆の一人“加藤清正”です。1588年、豊臣秀吉から肥後半国を与えられ、同時に桔梗紋も与えられました。熊本城の瓦などに桔梗紋が見て取れま

上王社の桔梗紋は明智光秀に由来と考えた時、中央社は明智光秀或いは山崎の戦い(天王山の戦い)繋がりで加藤清正の蛇の目紋を使っと推測できます。

## 上組『西親社(せいしんしゃ)』

西親社は、西町上・下、西町駅通り上・下のだんじりです。

西町に金比羅さんがいます。讃岐国総本山金刀比羅宮にまつわる“親”の字が含まれる武将は、讃岐国金刀比羅宮の賢木門を献納した“長宗我部元親”です。



織田信長が本能寺の変で明智光秀に討たれたまさにその日、四国方面軍は四国へ渡海し長宗我部元親を攻める予定でしたが織田信長が討たれたことで撤退し、織田信長と敵対していた長宗我部元親は危機を逃れました。

長宗我部元親と主君織田信長の間を取り持っていたのが明智光秀です。

社紋は、町の北に位置することで四神の北の霊獣“玄武”から「亀」です。唯一、だんじりの宮の前後破風板の左右、「車紋」の中に“西”と書かれたものが取り付けられており、亀紋と車紋に表紋裏紋の解釈は特にはないとのこと。

車紋の中に“西”は上王社の裏紋と同じで、西親社も使う

由来がはっきりしていません。大正12年創建の西親社より先に裏紋として使っていた上王社が、西の字を書き入れていたことで西親社にこの紋の使用を認めたと考えられます。

## 下組

下組は、5社とも表紋は「桜紋(山桜紋)」です。

江戸時代後期に「朝陽社」と「東明社」が創建されており、どちらも氏神は鍋屋八幡神社です。

鍋屋八幡神社の社伝によると保安元年(1120年)山城国石清水八幡宮(京都府八幡市)から勧請されたとあり、石清水八幡宮は京都の南西“男山”に鎮座し、平安期の頃から山一帯が“桜”の名所です。

男山のすぐ近く、桂川、宇治川、木津川が合流して淀川となります。男山からこの合流する側に“天王山”が対峙します。

多くの武将に厚く信仰された石清水八幡宮が鎮座する男山の目の前の天王山で、羽柴(豊臣)秀吉と明智光秀が戦いました。男山の山桜は戦の模様を目撃していたこととなります。



だんじり喧嘩で待機する下組のだんじり

上組の上王社・中央社・西親社は戦国武将繋がり、下組は戦の場を目撃した山桜と推測できます。

## 下組『朝陽社(ちょうようしゃ)』

朝陽社は、下町と旭町のだんじりです。

社名の朝陽社は、町の東に位置し陽が昇る町の意で“朝陽”が使われ、社紋は「桜」に“朝”の字が表紋です。

戦後、朝陽とは日の出のことから“日の出組”とも称し、法被など桜紋に朝陽の“ひ”或いは日の出組の“ひ”と平仮名で書き入れたものは裏紋です。

今日は宮の提灯に、表紋と裏紋が描かれ社名も朝陽社と日の出組が書かれています。



## 下組『東明社(とうめいしゃ)』

東明社は、東町と元町のだんじりです。

社名は、朝陽社の陽が昇る意を受け、日の出を迎えると東町は明るく照らされることで東明社と思われます。

社紋の表紋は、「桜」に町名の“東”と書き入れています。裏紋は、法被の背中などに描かれている「龍の爪」で、四神の東の霊獣“青龍”からと言われます。

いつ頃から裏紋として龍の爪を使い始めたのか、龍に関する紋で、なぜ龍の3本爪の紋にしたのかははっきりしていません。また、龍の爪紋は3本爪の先に玉持ちの描写が一般的ですが、玉は描かず簡素化したデザインを使っています。



## 下組『榮朝社(えいちょうしゃ)』

榮朝社は、栄町と中央町のだんじりです。

中央町は、昭和30年頃、今日の国道181号線工事が開始し新設された地名です。榮朝社は、昭和3年創建。2年間かけだんじりを製作したと言われます。

社名の“榮朝”は、朝陽社・東明社の社名の流れを受け、陽が昇り明るくなり、そして朝を迎えることで町名の旧字“榮”に“朝”と思われます。

社紋の表紋も朝陽社・東明社に倣い「桜」に旧字の“榮”を書き入れています。

裏紋は、栄町は芸者町だったことから「扇子」に“さ”と平仮名で書き入れています。これは、昔、東町と西町の境で“さかいまち”とも言われ、“さかいまち”“さかえまち”のどちらも表せる意が込められていると聞き及びます。

また、扇子紋は「重ね扇子(二本の扇子)」で、社旗や提灯、宮幕はだんじりに向かって右に裏紋の扇子、左に表紋の桜と本来の逆の配置です。昔から、東明社は本家で榮朝社は分家と言われ、昭和3年、榮朝社創建の際、社紋の配置を目に見える形で分家を表したと思われます。



## 下組『惣高社(そうこうしゃ)』

惣高社は、惣と高瀬地区のだんじりです。

社名は地区名の“惣”と高瀬の旧字“高”を使っています。昭和54年、祭に参加し、一人前のだんじりになるまで下組「桜紋」の五弁桜ではなく「八重桜」にした経緯があります。

また、八重桜の中の“高瀬舟”に“惣高”と書き入れた図柄は、昭和30年代まで高瀬舟の波止場があったことに由来しています。

平成4年、馬車台や突き組など喧嘩仕様だんじりに造り替え、平成7年“だんじり喧嘩”に加わります。

平成18年、下組3社と上組3社の許しを得、晴れて五弁の「桜」に“惣高”と書き入れたものを表紋とし、それまでの「八重桜」を裏紋としました。





## 上組『若王社(わかおうしゃ)』

若王社は、河元・黒尾・野白地区のだんじりです。

昭和 58 年から祭に参加。平成 5 年、喧嘩仕様だんじりを新調。平成 7 年“だんじり喧嘩”に加わりました。

社名は、地区の氏神朝日神社の神社地“若王神社”で本祭りの五社立合(久世神社・朝日神社・鍋屋八幡神社・三榮神社・惣八幡神社)の神祭が執り行われることから“若王”を頂戴し、社紋も若王神の“蔓四方花菱”を頂戴し“若”の字を書き入れています。また、表紋裏紋の解釈はなく、この蔓四方花菱のみを使っています。

## 下組『泉朝社(せんちょうしゃ)』

泉朝社は、泉と下原地区のだんじりです。

昭和 63 年、先代朝陽社のだんじりを譲り受け、当初は自地区内のみ曳行し平成 2 年より祭に参加。平成 7 年“だんじり喧嘩”に加わり、平成 20 年、宮を新調。

社名は、地区名の“泉”と、下原の氏神朝日神社の“朝”を頂戴し“泉朝”としています。

今日、行政区としての泉はなく昔の名残で泉公民館があります。この公民館近くで湧き水が出ることでこのあたりを泉と称します。湧き水は泉から下原を流れていることで「桜紋」に水の流れをイメージした 3 本の線を描き、桜の中には“泉”の字から“い”と平仮名を書き入れています。

唯一、だんじりの宮提灯に桜紋の中に“泉”と漢字で書かれており、表紋裏紋の解釈はないようです。



## 過去、存在しただんじり

### 上組『新上社(しんかみしゃ)』

昭和 51 年頃から平成 4 年まで祭に参加していた黒尾住宅のだんじりです。

町の西に位置する黒尾住宅だったことから、新しく加わった上(カミ)のだんじりの意で“新上社”を名乗っていたと思われます。

社紋は、「梅花」の中に“新”と書き入れたものと「桔梗」の中に“上”と書き入れた重ね紋で、桔梗は上王社の表紋を頂戴したと思われませんが、梅花の由来がはっきりしていません。

新上社は華だんじりとして祭に参加し、使わなくなっただんじりは平成 6 年登場する久世商工会のギャルだんじり麗新社として生まれ変わります。

黒尾住宅有志でスタートさせ、青年が揃わなくなり二十歳を迎えることなく 16 年程で新上社の歴史は閉じました。

## 《後書き》

江戸後期の時代背景、牛市と宿場町で栄えた久世の地域性を鑑み、だんじりの社名社紋を考察した内容は一説に過ぎず、今後の調査研究の一助となることを願い、聞き取りなどご協力頂いた諸先輩方にお礼を申し上げます。